

## 第4章 調査の総括

### 4-1 提言

本プロジェクトでは、沖縄・ラオス国口唇口蓋裂患者支援センターとセタティラート病院歯科部のみならず、小学校児童から学校教員さらには保護者、地域住民へと広がっていった。さらに、プロジェクトに賛同した、沖縄は琉球大学や大正製薬の効果的な協力関係、ラオスはラオス国立健康科学大学などを巻き込むことによって効果的な協力が築かれた。このような連携が可能となった一因としては、プロジェクトが観念的な議論に終始するのではなく、「現場レベルでの目に見える成果・目標」を設定し、それに向けて関係者間の調整を図ったことが挙げられる。現場レベルでの具体的な目標設定と協力体制の構築は、以前からわれわれ沖縄・ラオス国口唇口蓋裂患者支援センターがラオス国に対する医療援助、技術移転、学術交流を地道に行ってきたことが本プロジェクトによって実証された。

### 4-2 教訓

#### (1) ラオスでの課題

ラオスでは2005年に、教育省及び保健省にて国家学校保健政策の策定が行われたにも関わらず、学校歯科保健体制及び十分な予算の確保ができず、他地域では予防歯科・学校歯科保健に対する意識が低く、児童や保護者、市民に対しての普及啓発が十分とは言えない。小学校も新入生が毎年入学してくるが、これまでの経験からむし歯有病者率が高いことが判っており、学校での検診など予防歯科の継続が望まれる。Dental Associationは結成されたものの歯科医師同士の横の連携は始まったばかりである。また、地域・個人においても経済格差が大きいため、自ら歯科治療に通うのは限られた人々のみである事実もある。

(注) 歯科の1回の治療費は50000キップ（約6\$）。

#### (2) 今後のあり方

よって、「ドンコイ小学校をモデル校」とし、さらに隣接する学校へ予防歯科・学校歯科保健の概念を普及・啓発・拡大していく必要がある。つまり、ラオスの学校保健における“学校”の位置づけが、寄生虫コントロールの場所から、「歯ブラシ1本からはじまる・・・」地域の健康増進活動の拠点として変化し、HPSの概念が共通認識されるようにならなければならない。

さらに上位目標に近づけるためには、小学校レベルから予防歯科・学校歯科保健の概念を普及・拡大を継続させながら、地域レベル→県レベル→国家レベルへとボトムアップを図る必要もある。

合同評価の結果を受けて、保健省、セタティラート病院、ラオス国立健康科学大学、ドンコイ小学校など3モデル校、ラオス国立大学は、本事業の継続を、新入生を迎える学校での予防歯科、住民の意識・行動変容の維持発展、モデル校の成果の定着、近隣への普及を考え、間が空くことなく継続されることを強く望んでいる。

沖縄・ラオス国口唇口蓋裂患者支援センターは、口唇口蓋裂患者のチャリティオペレーションを続けていくこととしており、本事業も併せて継続することを検討している。

評価において、本事業が学校保健、ひいては地域保健のあり方を示していることが確認されていることを踏まえ、次のプロジェクトの検討が関係者間で進められるべきであろう。例えば、予防歯科概念の普及・定着発展のためには、母子保健の中に妊婦歯科検診・乳幼児歯科健診を組み

込むことが有効かつ効率的であり、地域母子保健に携わるボランティアとの緩やかな連携も視野に入れることも一案である。また、ドンコイ村での継続的な実施に当っては、青年海外協力隊OVなどを起用し、長期的な配置の検討も考えられる。

#### 4-3 所感

##### (1) 教授 砂川 元

沖縄・ラオス国口唇口蓋裂患者支援センター沖縄歯科口腔外科学研究振会  
琉球大学大学院医学研究科顎顔面口腔機能再建学講座

海外医療援助活動に対する関心の原点は、高校時代のベトナム戦争にあらう。昭和30年代後半に高校生であった私は、連日の新聞報道で、「我が生まれ島にある嘉手納空港から飛び立つB52爆撃機によるベトナム北爆!？」の現実を目の当たりにしていた。その後、歯科口腔外科医としての人生を歩んでいたが、1999年に日本口唇口蓋裂協会が行っている「ベトナムにおける口唇裂口蓋裂患者に対する援助活動」に参加する機会が与えられたのを契機に海外医療援助活動を行うようになった。1999年、2000年とベトナムでの活動に参加した後、2001年から琉球大学医学部附属病院を主体とした「ラオスでの口唇裂口蓋裂患者に対する医療援助活動」が始まった。

ラオスにおいても、生命に直接影響を及ぼすことのない疾患である「口唇裂口蓋裂」に対する治療は充分でなく、未就学児はおろか、小・中学生から成人に至るまでの未手術患者が多く見られた。この活動を通して、「これで学校に行って勉強出来る」と言った小学生や「これから結婚できる」と話した37歳の男性など、手術後の多くの口唇裂口蓋裂患者に「笑顔」を見ることが出来た。しかし、その「笑顔」の中に、「多数のむし歯」を持つ患者がほとんどであることに衝撃を受けた。日本では、「8020運動(80歳になっても自分の歯を20本残そう)」という啓発活動が行われているが、ラオスではほど遠く感じられた。特に乳幼児から小学生の間に、徹底した「う蝕予防」を行わないと、健やかな成長が望めないのも現実である。「口唇裂口蓋裂は治療されたが、う蝕は放置されている」では、私たち歯科医師としての責任は不十分であると考えた。日本国内における学童のう蝕罹患率は減少しつつあるものの、未だ充分であるとは言えない。特に、沖縄県の子どもたちの「う蝕罹患率」は47都道府県中、常に下位にランクされている。これらのこととも相俟って、「ラオスでのう蝕予防活動で成果をあげて、その手法を沖縄に是非、持ち帰りたい」との願いも込めてJICA草の根事業に応募したのである。

「学童のう蝕予防」にとって、最も大切なことは、学童よりもむしろ「歯科医師、学校教師、家族」の三者の協力であると考えた。そこで、ラオスでの「口唇裂口蓋裂手術」を実施しているセタティラート病院に隣接する「ドンコイ小学校」児童を対象としたJICA草の根事業による「一歯ブラシー本から始まるお口の健康」を計画した。すなわち、私たちと私たちのカウンターパートであるセタティラート病院歯科スタッフとの共同で、ドンコイ小学校児童の「歯科検診」を実施し、セタティラート病院歯科スタッフによるう蝕歯の治療ならびに学校教師と家族に対する予防歯科の重要性についての教育を担当してもらう。治療終了後は、セタティラート病院歯科スタッフによる口腔管理のみならず、教育によりう蝕予防の大切さを理解したドンコイ小学校教師と家族によって、新たなう蝕歯を発生させないようにう蝕予防を徹底させる。最後に、学校全体の学童のう蝕罹患率が減少するかを検証する事業である。いうまでもなくカウンターパートであるセタティラート病院歯科スタッフがキーパーソンである。

2008年度に始まった本事業は、年2回の学校歯科検診と年1回のカウンターパートの来沖研修が主であった。当初は、ドンコイ小学校のみをモデル校として行う予定であったが、JICAの指導によりノンハイ小学校、ボンパパオ小学校にラオス国立大学附属小学校が加わり、合計4校を対象とした。

ドンコイ小学校での第1回検診では、う蝕のない児童が133名中10名であり、う蝕歯保有者は133名中123名(92.5%)とかなりの学童がう蝕歯を保有していたのに対し、第5回検診では、う蝕のない児童が156名中62名(39.3%)と増加し、う蝕歯保有者は156名中94名(60.3%)と明らかに減少していた。また、ドンコイ小学校では、学年が進行するに従って、う蝕保有者率が低下しており、う蝕治療を行った学童においては、う蝕予防が維持・継続されていると考えられた。

このように、事業が進行するにつれて、う蝕予防などの効果は顕著に現れてきているが、事業開始当初のカウンターパートの理解が十分ではなく、先行き不透明の感があった。それは、カウンターパートの歯科医師等に「う蝕保有学童の歯科治療に際しての手当の要求」や「歯科治療をしても、大した効果が望めないのでは…」などによるものであった。しかし、口腔保健を通した学童の健やかな成長に対する歯科医師の果たす役割についての地道な議論と歯科医師やドンコイ小学校の校長先生が来沖し、琉球大学附属小学校や沖縄県内の地域歯科保健活動を研修してからの意識は明らかに変化し、積極的になっていた。このように歯科予防活動の現場を視察することは、意識変革に大きな影響を与えることを痛感させられた。今では、カウンターパートの歯科医師、学校教師が学童教育に積極的になり、家族への好影響も与えている。

去る2月には、本事業の最終評価がなされ、それなりの評価を得たものと思われるが、やはり、ラオス国内において歯科保健活動を担う歯科医師の組織化とその団体を通した実地活動の支援体制を確立することが今後の課題であり、学童の口腔保健を通しての健やかな成長をサポートする最善の道であると思われた。

## (2) 高嶺 明彦

沖縄・ラオス国口唇口蓋裂患者支援センター 沖縄歯科口腔外科学振興会長

ラオスの子どもたちの明るい未来のために

私が、初めてラオス国を訪れたのは、平成15年11月のことでした。琉球大学医学部歯科口腔外科の砂川 元教授を中心とする、ラオス国口唇口蓋裂医療支援プロジェクトに同行させていただいたのが、その始まりでした。それ以来、医療人として、ラオスの人々、特に子どもたちの口腔内環境の劣悪さに心を痛めていました。

幸いなことに、平成20年から、JICAの草の根支援事業として、本会が応募した「ラオスの子どもたちの口腔衛生の向上と、むし歯を減らす」ための事業計画が採択されました。私も、このプロジェクトに参加させていただき、今年の2月まで5回にわたりラオス国を訪問しました。このプロジェクトでは、3年間にわたり、6回の歯科健診と5回の歯科治療を行うことができました。その結果、第1回の健診では、92.5%であった、むし歯有病者率が、3年後には、60.3%にまで改善し、大きな成果をあげることができました。

今回のプロジェクトで、私が最も嬉しかったのは、この素晴らしい「優しさと笑みのあふれる国」、私の大好きなラオス国の子どもたちの歯と口の健康の大切さについて、ラオスの皆さんと一緒に考えることができたということです。私たちからの一方的な押し付けによる支援ではなく、

共に考え、信頼関係を構築して、共に行動することができたと言えます。セタティラート病院、対象となった小学校の父兄、教職員、児童のすべてが、単なる受益者ではなく、オストロムが言うところの、まさに Coproduction としての驚異的な結果であったと思います。それが、ドンコイ小学校においては、日本の都道府県の中でも第 5 位に位置づけられるほどのむし歯有病者率の減少に結びついたのでした。

我が国においては、歯と口の健康が、生涯にわたってその人の生活を支える、という認識が確立されてきています。今回のプロジェクトで、私たちは、目覚ましい発展を遂げるラオスの人々と、この認識を共有することができたと考えています。

同じアジア人として、またアジアに門戸を開く日本の玄関としての沖縄県民として、ラオス国の将来を背負って立つ子どもたちのために何か力になれないかと、常々考えてきました。特に、私たち沖縄県民にとっては、まさにラオスは、私たちが幼かった頃のふるさと沖縄を彷彿とさせてくれる国なのです。それだけに、尚一層ラオスという国に親しみが湧くのだと思います。悠久の時間が流れる国ラオスには、私たちが遠い昔になくしてしまったものが、たくさん残っているような気がします。

今回のプロジェクトは、一つの通過点にしか過ぎません。今後とも本会は、この貴重な経験を活かして、ラオス国の人々の将来にわたる健康で明るい生活を支えるために、私たちに何ができるのかを考え、行動に移していきたいと決意を新たにしています。

### (3) 仲宗根敏幸

沖縄・ラオス国口唇口蓋裂患者支援センター沖縄歯科口腔外科学研究振興会  
琉球大学大学院医学研究科顎顔面口腔機能再建学講座

思い起こせば、平成 16 年 11 月 5 日訳も分からず、砂川教授、砂川奈穂先生、私 3 人で那覇国際空港からラオス国に向け旅立った。名目としては、沖縄・ラオス国口唇口蓋裂患者支援センター — 沖縄歯科口腔外科学研究振興会 — による「ラオス国児童に対する歯磨き指導による口腔衛生改善事業事前調査」であったが、帰国するまでこの旅の重大さを私は、知るよしもなかった。

われわれ沖縄・ラオス国口唇口蓋裂患者支援センターは、H12 年よりラオス国口唇口蓋裂患者に対する無償手術を行ってきた。その際、患者の口腔内環境の劣悪さに驚かされたことに端を発し、平成 16 年に第一回、平成 17 年に第二回ラオス歯科事情事前調査のため視察を行った。これら事前調査を踏まえ、平成 17 年 9 月に JICA 草の根技術協力事業・協力支援型案件に「ラオス国児童に対する歯磨き指導による口腔内清掃状態改善事業（歯ブラシー本から始まるお口の健康）」として申請した。われわれとしては、案件を申請してから 1 年足らずで採択内定がもらえるものだと思っていた。しかし現実はその甘くはなかった。案件採択までの道のりは長く幾度と無く、挫折しそうになったが、その度ごとにラオスで出会った子供たちの笑顔が私たちを支えてくれた。

ラオス国はアジアの中で最貧国の一つであり、保健医療分野においても多くの課題を抱えていた。実際、国民の健康向上に直結する口腔衛生分野においても公的な歯科保健サービスが立ち遅れており、住民にとって適切な歯科保健指導を受ける機会は極度に制限されていた。また、ラオス国においては学童期の児童に対する予防歯科および歯科保健教育も確立しておらず、さらに、歯科医師の横の連携もないため予防歯科に対する動機付けすら行われていない状況であった。そこで、総合的な歯科保健を実施することおよび予防歯科の啓発（住民を含め）を行う目的で、歯

科保健・予防歯科の分野に精通しているわれわれ沖縄・ラオス国口唇口蓋裂患者支援センター ― 沖縄歯科口腔外科学研究振興会 ― 会員の歯科医師が、平成 20 年 6 月 22 日～6 月 29 日まで約 1 週間現地ラオスに出向いて活動を開始することになった。活動期間は平成 20 年 6 月から平成 23 年 3 月までの 2 年 9 ヶ月間である。約 3 年後には、ラオス児童の本当の笑顔に会えることを心に抱いて、活動を行ってきた。その結果、驚くほどの成果が出た。しかしながら、われわれがモデル校としたドンコイ小学校のみであり、この結果を踏まえて、われわれは、さらなるプロジェクトのステップアップを図らなければならない。

#### (4) 玉林 洋介

JICA 沖縄市民参加協力課長

学校保健制度の導入が遅れているラオスにおいて、予防歯科に限られているが、その重要性を例証する一助となったと考える。また、沖縄では、琉球大学とラオスとの関係強化への寄与などのインパクトもあった。終了時評価では数値での目標を達成したことも確認した。しかし、何よりも、地域(ドンコイ村)を巻き込み、村民の行動変容をもたらしたことを高く評価したい。

採択前に、事務所は条件として、モデル校数の増、セタ・スタッフや歯科大学生の育成、デンタルフェアなどを加えさせ、ラオス口唇口蓋裂患者支援センターの負担を大きくし、また、ラオス側の期待を膨らませることとなった。JICA としては、実施団体のやりたいことと能力、予算を考えた上で指導が必要であった。

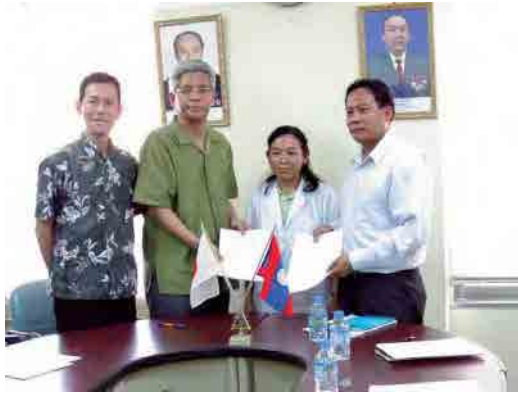
広げられた目標・成果に対して、支援センターは、自己負担での会員の参画を募り、さらに裨益者であったドンコイ小学校、ラオス国立大学(後に保健科学大学)を主体者としてプロジェクトに巻き込み、これを補ってきた。この努力の結果が成果を引き出せたと考える。

ラオス側は自らの歯科検診を続けると約束した上で、プロジェクトの継続を強く望んでいる。(帰国後にセタティラート病院長からも継続の要請が提出された。)支援センターも口唇口蓋裂患者の無償手術と共にこの活動を継続する意向である。しかし、会費だけに頼る支援センターの資金力では限界がある。

事務所とはプロジェクトの成果を共有し、「続けられたならば」と意向があることは確認した。フェーズ 2 については、当初はプログラムに位置付ける、既存プロジェクトと連携させるなどして検討されるべきと考えた。評価報告書でも触れているとおり、子供の虫歯を減らすためには、未就学児からのブラッシング励行が求められ、母子保健プロジェクトとの緩やかな連携にも言及したが、母子保健プロジェクトは南部で実施され、また、セタティラート病院そばのドンコイ村での定着・普及が重要、必ずしもプログラムと連動する必要はない、事務所は形成を支援したい、とのコメントがあり、別の方策を模索することとした。

結論から言えば、パートナー型での検討となる。ハードルは非常に高いが、支援センターとチャレンジしたい。

最後に、残念なことであるが、本件に関しては当センター職員が一度も現場に訪問していなかった。事務所も小規模な支援型で活動が限られていることから、大久保議員が訪問するまでは所員が足を運んでいなかった。支援型といえども、本件のように想定外のインパクトを引き出すのが常であり、丁寧な対応も求められる。



合同終了時評価終了の署名式



合同終了時評価を行うセタスタッフと沖縄・ラオス口唇口蓋裂患者支援センターのスタッフ



セタティラート病院の廊下で予防歯科の大切さを伝えている



ドンコイ小学校で虫歯について授業を行うセタスタッフ

## 第5章 1年次及び2年次の活動概要

### 5-1 1年次の活動概要

#### (1) 第1年次の活動

- 1) ドンコイ小学校の児童の歯の治療及び児童に対する定期的な歯磨き指導と定期健診、勉強会のための教材開発と勉強会の開催。
- 2) 第2年次以降の本成果の活動にあたり、第1年次のプロジェクトの成果が確認できた。
- 3) 学校歯科検診、カルテ管理等の本邦研修、歯科医師への技術指導、勉強会の実施。
- 4) 学校歯科検診、勉強会の開催。
- 5) セタティラート病院でのデンタルフェアの実施。

#### (2) 第1年次の成果

- 1) ドンコイ小学校児童のう蝕罹患率を把握し、ベースラインを確認した上で、全ての虫歯治療を完了した。また、児童・教師・親に対する勉強会により歯の大切さについて良く理解されたとともに、教師による児童への継続的な歯磨き指導により、児童のブラッシング状態の改善が見られた。
- 2) ドンコイ小学校での第1年次の成果を確認し、成果を踏まえた第2年次以降の計画立案が可能となった。
- 3) 歯科医師に対する勉強会及びカウンターパート研修により、児童から予防歯科に取り組むことの大切さが良く理解された。また、これまで作成していなかった虫歯の治療計画と処置を記載するカルテがセタティラート病院歯科部に導入された。
- 4) 歯学部学生プロジェクトへの参画が認められた。
- 5) デンタルフェアは人の多く集まる場所で開催すべきであることが認識された。



児童、教師、父母に対する勉強会



虫歯予防の大切さを知らせるデンタルフェスティバルを現地の病院で開催



染出し液がきれいに取りれるまで歯を磨く子供達



ドンコイ小学校での歯科検診の様子

## 5-2 2年次の活動概要

### (1) 第2年次の活動

- 1) ドンコイ小学校の児童の歯の治療及び児童に対する定期的な歯磨き指導と定期健診、勉強会のための教材開発と勉強会の開催。
- 2) ドンコイ小学校をモデルとし、ポンパオ・ノンハイ小学校でも保健の先生が定期的に児童にたいするブラッシング指導を行う。
- 3) 学校歯科検診、カルテ管理等の本邦研修、歯科医師への技術指導、勉強会の実施。
- 4) 学校歯科検診、勉強会の開催。
- 5) セタティラート病院でのデンタルフェアの実施。

### (2) 第2年次の成果

- 1) 第1年次から活動を行っているドンコイ小学校では、保健の先生を始めとした学校関係者が児童に対し主体的にブラッシング指導を行うようになり、その結果、同校における虫歯の無い児童の比率が活動開始時に比べ大幅に改善(7.5%→23%)され、同校における予防歯科体制が着実に確立しつつある。
- 2) ドンコイ小学校の校長先生が沖縄での本邦研修に参加し、予防歯科への取り組みの具体的な事例を学ぶと共に、帰国後は、第2年次から活動を始めたポンパオ・ノンハイ小学校の校長先生と定期的に情報を共有するなど、同校が拠点となり、プロジェクトの活動が普及していくことが期待できる。
- 3) セタティラート病院歯科医師が予防歯科の必要性を理解しはじめ、患者のカルテ管理について、計画立案を行えるようになりつつある。

